

の経験を踏まえて新しいライフスタイルを作っていくことは可能だ。

普通の仕組みの中で生きる毎日の中で、日本中が震災を忘れてしまうだろう。今回得た多くの気づきをいつも心に思っていて、子ども達を教育して、次の未来のために生き残る日本を作っていかなければいけない。

あの時、「来るよ」と言われ続けながらも30年後かもしれないと思っていたことが、今日来たのだと思った。皆さんに「今日その日が来る」ということを肝に銘じてほしい。「その時」のための準備と子ども達への教育は、今からしておける。

《番頭》 これから日本を作る人達に来てみてほしい。今しかないし、これはまぎれもない事実。そこに生活があったものが津波によって崩れた事実を見て、多くの人に伝えてほしいし、いろいろな分野で活用して行ってほしい。もともと高齢化が進んでいた町で、さらに人が減ってしまった。だから一緒にこれからのことを考え、後押しをしてもらいたい。贅沢な願いかもしれないが、長期的に後ろから支えてほしい。

《女将》 5歳の女の子が「津波より強い人は、津波より高いところに逃げる人。誰かを助けるために波にのまれた人も、強い人」と言っていた。5歳の子どものように言わせるような、悲しいことが起こらないようにしていきたい。

海は怖くないし、水も怖くない。ただ地球が動いただけの出来事。海は見えていないと異変を感じ取ることができない。津波が来るまでには短くても5分はあるのだから、5分で逃げられる場所を作り、立ち向かう勇気を持つことが必要だ。



撮影：2011.10.20 宝来館の眼前に広がる海

個人

遠野市

森を見て活かすことで気づく。 自然と共生するため人は謙虚にならなければ。

岩間 敬 GLOBUS

取材日 2012.1.24

馬と共に山に入り、伐採された木を馬による木材の運搬方法「馬搬（地駄曳き）」で運び、昔の技術そのままに炭を焼く。今では珍しい循環農法で馬の堆肥を肥料にした「馬米（うまい）」も販売。養蜂などの山仕事、人と馬が共生する営みを継承している。「GLOBUS」は自然の恵みと共に暮らす岩間さんご夫婦が提供する生産物ブランド。

個人

3月11日 14時46分

遠野市立図書館で環境映画の上映会を行っていた時に、大きな揺れが起こった。今までの地震とは違うと直感的に思った。今まで経験した震度5や6の地震とは明らかに違う揺れであったし、図書館の前を流れる川の水が濁っていた。この時点で津波が来る、大変な事になるだろうと思った。

家族のことが心配で、自宅へ車を走らせた。市内の信号は消えていて、家路を急ぐ車で道は渋滞が起きていたが、なんとか家に着くことができた。

農家の強みで、普通の生活

電気がストップすれば、電化製品は使えなくなるのは当たり前の事である。ここで農家の強みを発揮した。水道水も少しは出ていたが山水も自家水道として地域全体で各家に引いているので、歩いて2分程の所で湧水を汲むことができた。

暖は電気を使わないだるまストーブでとった。情報が知りたかったので、発電機を使ってアナログテレビをつけた。ほとんどの人は知らないが、ブレーカーを落として発電機を直接コンセントに繋げると、自家発電機として使うことができるのだ。今回のような緊急時に使うことができたのは、父

の教えがあったおかげだ。父は大工で、今の自宅も材料、造成、基礎工事まで、父がハンドメイドで建てた家だった。そんなオールマイティーな人間だったので、今回は父の知恵がとても役立った。3月ということでも冷凍食品は外でそのまま保存できたし、作りおきの食べ物や米や野菜も豊富にあったので食材にはそれほど苦労をしなかった。炭で調理できる蒸し窯で米を炊き、おにぎりにして自転車で市民センターに届けたりもした。1ヶ月くらい生活できるほどの薪のストックもあったので、薪風呂にも入ることができた。通常の暮らしより少しだけ生活水準を落とした程度で生活することができたのは、一重に農家の強みだと思う。今回の震災を機に薪ストーブを家に導入した。リビングに設置するのが一般的だが、母の進言で家全体を暖めるために家の中心部に設置した。2階まで住居全体を効率よく暖めるためだ。

木材を運んだのは…

破壊された大船渡の町を初めて見た時は、津波の力の凄さを改めて感じさせられた。

陸前高田市に知り合いがいたので、米や薪や炭を大量に寄贈することにした。当時は寒い日々が続いたので、薪や炭は被災地で暖をとるのに大いに役立ったと聞いている。

被災地は5月を過ぎる頃まで復興のための片付けに追われていて、林業で使う重機は主に瓦礫撤去に使われていた。一方で、沿岸地域の漁師小屋が津波で流されてしまい小屋の建築のために材木が必要だという。この時森から材木を運んだのが「ばんえい種」と呼ばれる馬だった。

吉里吉里林業大学校・馬搬 (馬で木材を運ぶ)

「吉里吉里林業大学校」では、馬と人による環境に優しい木材搬出技術である「馬搬」の継承と普及、宣伝を行っている。重機を使った作業は動線確保のために不要な木を伐採して山を傷めるし、二酸化炭素を排出する。馬搬は燃料も使わず山を削り傷める事もない。山と海はお互いに強い関連性があり、豊かな漁場である海を守りたければ森や山のお手入れが欠かせない。森の整備をすることは、地球のお掃除をするようなもので、やがてその効果は川や海にも影響する。

大槌町で6月から始まった吉里吉里林業大学校の林業研修で、愛馬「サムライキング号」を連れて馬搬のデモンストレーションを行った。伐った木材をある程度の長さ揃えて金具に連結する。馬はチェーンでその金具を引っ張る。地理条件で運び本数は変化するが丸太サイズで1度に4-5本の



木材を引くことができる。「馬力」「馬車馬のような働き」と言うけれども、人間の力で動かそうと思えば何人もの手が必要な太くて長い木材も、馬はあっという間に引くことができる。多い時には一日40-50本の木材を搬出できる能力を持っている。丸太を楽々乗り越えて林内を進むことができ、4本の足で現場を自由自在に動くことができる。馬搬はハイテク化の進む現代においても、十分に通用するほどの作業効率性を持っている。かなりの急斜面を行き来することもできるし、人が行けそうなところならどこへでも入って行くことができる。飼い主と意思疎通ができるようにまで成長すると、手綱さえも外して声だけで指示することが可能になる。動力としてとても優秀な馬に気持ちよく働いてもらうために、人間も優秀でなければならないと思っている。

大震災を振り返って

本当の豊かさや幸せとは何かと考えた時、田舎は電気も使うが薪も使うし、山を活かして自給自足もする。しかし、都市部に入れば入る程、便利で他人まかせにしすぎている。お金を払えば蛇口から水が出るが、良い環境でなければ良い水も出ない。地球に生かされているのに、自分たちは地球に還元しているのかといえば疑問に思う。他人まかせで、本当の幸せとは何なのかを錯覚して生きてしまっている。時代にとらわれてはならない。「鳥かごの中の鳥」のように飼いならされてはならない。「人間は自然に活かされて生きている。国土の多くを森に囲まれている日本は、森を見てそれを活かすことで、人が気づくこともたくさんある。自然と共生するためには人間は謙虚にならなければ」と言う教訓を教えてくれて、「知恵を出し合って生きる」ことを教えてくれたのではないかと痛感する。

これから

「ワーキング・ホース協会」が主催しイギリスのチャールズ皇太子が名誉総裁を務める「地駄曳き競技会」に昨年出場し、優勝した。この大会は、6mの丸太を馬で引く競技で、スラロームしたり、丸太を載せる馬車に丸太を載せる正確さを競う。今年も昨年に引き続きイギリスでの大会へ出場を予定している。「地球環境を考える中で地駄曳きは絶対必要な職業」であると確信している。



馬が伐採した木材を運ぶ

NPO

海と山と川があって、はじめて暮らしが成り立つ。

大槌町

芳賀 正彦 NPO 法人吉里吉里国

取材日 2012.1.24

吉里吉里地区はこれまでも幾度となく災害が起きた地区で、先人たちは厳しい自然と折り合いをつけて生きてきた。当NPOは震災後、先人の「自然と共生する知恵」に学び、住民自らリスク管理できる街づくりを目指そうと住民有志が自ら設立した。地域の財産である海と山の恵みを最大限に活かし、新たな雇用の創出をしながら地域再生に取り組む。

3月11日 14時46分

あの日、高さ約15mの大津波に襲われた。自宅から避難する時は、ラジオと携帯電話だけを持って逃げた。逃げる途中、携帯電話のカメラでシャッターを切り続けた。でも、保存のボタンを押さなかったため、その当時の画像は1枚も残っていなかった。何も考える余裕がなかった。吉里吉里小学校に避難し、津波が来るのを見ていた。津波の第1波から最後の波まですべてを見ていた。津波が引いた後は、町がほとんど無くなっていた。ただ茫然とするだけだった。「何もかもが終わってしまった。」「個人、家族、町の人の暮らしが無くなってしまった」と。

町の人々と協力して

寒い日だったので、避難所にいた男性達が壊された家の廃材を避難所に運び、小学校の校庭で暖をとった。同時に別の男性はスコップを探して校庭に穴を掘り、男性用、女性用のトイレを作った。女性達は手分けして高台に残った家を1軒1軒回り、食料や毛布など物資を集めるのに奔走した。行政機関とも連絡はとれない。自治組織や消防



分団員などのリーダー達が約12名程集まり、自主的に災害対策本部を立ち上げ、活動を開始した。町には4台ほど重機が残っていたので、次の日から重機の所有者と協力しながら国道や町道の瓦礫を撤去した。同時に行方不明者の捜索、町の農村グラウンドの瓦礫を撤去してのヘリポートづくり、町の小さなガソリンスタンドの地上部分は津波で破壊されていたが地下タンクに残っていた石油、灯油の汲み上げ作業に追われた。災害から3、4日目にヘリポートも完成し、自衛隊が到着して緊